「魔風恋風」考

―受容・材源・テクストについてのノート―

土佐　亨

序

小杉天外は、その著「初すがた」(明33)と「はやり唄」(明35)の序文によって、ゾライズムの移植者たる前期自然主義作家としてほぼ定位しているといえよう。だが文学史的存在としての天外は、この明治三十五年あたりまでであって、以後の野心大作や長命(昭27没)にもかかわらず、文学史からは姿を消した。〈実は天外の文学史的意義はこのあたりに尽きる。以後彼の企図は更に大じかけになり、評判は更にあがるが、本質的に進歩はなく、むしろ後退してゐるといってもよい〉と吉田精一氏[1]は述べている。「魔風恋風」(明36)や「コブシ」(明39―41)の大作は、昭和初期の円本全集の類に収録され、明治大正のベストセラーであったことをうかがわせるに足りるが、今日では、まったくの通俗小説としてまともな考察の埒外に出てしまった。天外について考察した現代文学史家の「魔風恋風」の評もその点で一致している。片岡良一氏[2]は、〈序文に唄はれた写実的意図より通俗小説的傾向への深入りを顕著に示した〉と述べ、吉田精一氏[3]は、〈紋切り型の環境といひ、類型的な性格といひ、通俗小説の域を出ない。自立心の強く、意志の固いヒロインが、義理に負けずにあくまで恋を貫くことなく、環境と通俗的倫理に従って行く過程も新鮮とはいへない〉と述べており、瀬沼茂樹氏[4]もまた、〈学生恋愛を中心とする女学生の新風俗を扱った類型的な通俗小説の域を出ず、(略)当時の代表的作品ではあるものの、通俗的痼疾を明らかにしたもの〉と記して、この定説自体はほとんど動かしがたいといえよう。だが、失敗作や通俗小説の考察が無意義かどうかは問題の残るところであり、今日的意義はとにかく、或る時代を代表しえた作品というのはそれだけで考察の対象たりえる資格があり、その時代と関連して歴史的意味を確認しておくことは必要であろう。〈多くの人たちに読ませる才能も、一部で考えるほど

軽視はできない。才能にとぼしいために、どうやら純文学の作家であり得たという皮肉な見方もできる〉というのは和田芳恵氏[5]であるが、近代文学研究の欠陥をうがったことばとしても受け入れたい。

「魔風恋風」考察の意義のいまひとつは、この作が天外の創作生活の変曲点となっており、作家研究の上からも無視することが許されないという点である。天外の文学史的生命はこの作によって絶たれた結果となっており、ゾライズムの野心的作家たる彼をして、小説界の寵児の麗名と通俗作家の汚名を一時に持ち来たすに至った転換の問題作と考えられるからである。

ところで一世を風靡した大作「魔風恋風」の持っていた意味も、今日では一読して具体的に把握するということは困難になっているのではあるまいか。私は自省をこめて、「魔風恋風」がその時代に持った意義の復元を試みようと思う。今日、天外については、その著作集成はおろか、著作年譜も十分ではなく、伝記研究もなくて、低次元の段階ですでに難問をかかえているのであるが、以下、今後の研究の目安の一端として、「魔風恋風」の受容や材源・テクストに関してのノートを中間報告の形で、資料本位に並べてみたい。

一、受　容

問題は、「魔風恋風」が何よりも大衆性を前提としている新聞の連載小説であった点にある。『読売新聞八十年史』には「天外の『魔風恋風』」という一章があり、掲載前後の状況を次のように詳述している。

紅葉を失った読売は、本野社長も編集幹部も、いまさらながら驚きあわてて、文学新聞としての人気回復に苦慮した。（略）現実に紅葉が去って見ると部数の減退はすこぶる多く、本野も中井も紅葉に対する認識不足を悟るとともに、文学に対する認識を新たにせざるを得なかった。（略）「金色夜叉」のつなぎとして、江見水蔭の「花」、山岸荷葉の「雌蝶雄蝶」、広津柳浪の「形見の笄」など次々と連載して見ても大した反響もなく、ここに当時「はやり唄」の一編によって、一躍名声を博した小杉天外を客員として迎えることになったのである。天外は、「魔風恋風」を三十六年二月から九月にかけて連載したが、これはよく当って、「金色夜叉」とは別の意味で人気を取り、天外はたちまち有名になった。（略）「魔風恋風」は、明治時代の新聞小説として、いろいろの点で問題になった作品である。現実の社会に手本を求め、あえてじゅん化を加えず、当時の教養ある青年と、その世相の一端を大

胆に描写したこの小説は、一部からはいんとう(淫蕩)文学と非難もされたが、青年男女間の人気に投じ、自然多くの読者を開拓した。花柳界でも「魔風恋風」の歌がうたわれ、舞踊化され、歌右衛門や猿之助によって上演もされた。読売新聞は、これによって部数も増し、五千部増加するごとに「五千会」という宴会を開いて祝福したが、五千会は数回にわたって開かれるという人気であった。万朝はこれに横ヤリを入れ、社会風教を害するものだと社説で非難したほどであった。

当時文学新聞として人気を集めて一流紙であった読売が、同社の一枚看板「金色夜叉」の紅葉の退社によって衰退し、その挽回の社運を天外に賭けたのである。「魔風恋風」は「金色夜叉」に代わるべき大衆的作品として期待されたのであり、天外の創作意識にもその点があったとみなければなるまい。社の期待は報いられて余るものがあり、天外自身をも小説壇の絶頂に押し上げたのであった。

天外の人気が大衆読者によって支えられたのは、単に作品自体と発表舞台によるばかりでなく、明治三十五年前後の時点の文壇が、一時空白をもたらした感のある過度期であったことにもよると考えられる。田山花袋は、紅葉(明36没)・樗牛(明35没)・乙羽(明34没)の死をそこに採り上げている。

私に取(ママ)つては、この三つの死は、極めて大きな事実であつた。(略)自分が真面目になるより他、自分で自分を打ち立てる他、それより他には行く道はないやうに私には思はれた。/それは明治三十四、五、六、この三年間くらゐの出来事であつた。文壇はしんとなつて了つた。大家達もてんでに自分の領分に引込み、新進作家達も真面目にその作に熱中した。(『近代の小説』二十二)

明治三十五年には、荷風の『野心』『地獄の花』、花袋の『重右衛門の最後』、独歩の「富岡先生」「酒中日記」「運命論者」、藤村の「旧主人」等が発表され、新時代を拓く先駆的時点であることについては、つとに野村喬氏[6]が指摘し、今日では常識であろうが、これは、それぞれの後年の確立を見とどけた上で始発点の意味を確認した一種の結果論で、同時代の一般的認識とはかなり差があるのではなかろうか。同時代評を広く調査しなければならないが、文壇は外見的には沈滞し、硯友社二世の銘々の活動と、歴史小説や家庭小説・光明小説の通俗長篇が目立ち始めていたようである。花袋の回想には純文学と通俗文学を区別する意識が明瞭で、この空白の感を与えた時期を、〈鏡花・天外・風葉の時代〉と言い、〈草村北星のものだの田口掬汀のものだのが一時流行した。(略)さうしたものの流行は、たしかに文壇の一時の沈滞と堕落とを示してゐたやうなものであつた〉と述べている。

前掲の三人の死を天外の立場から推測してみよう。当時東京の最大書肆博文館の出版事業を主宰した大橋乙羽の死は、彼が同人であった硯友社関係にとって多大のショックであったことは、花袋も自分の問題として受けとらざるをえなかった。硯友社関係最大のスポンサーの死が彼らの作品発表にいかに影響を与えたかについてはなお未調査であるが、何らかの凹みは考えられよう。それに対して天外は、博文館の「太陽」や「文芸倶楽部」と関係することはなはだ少なく、明治三十年以降は、博文館に拮抗していた春陽堂の「新小説」や、後藤宙外の丁酉文社の「新著月刊」、大阪の金尾文淵堂から出ていた「小天地」、金港堂の「文芸界」を発表舞台としており、単行本はもっぱら春陽堂からであった。乙羽の死によって考えられる博文館やその関係作家の凹みは、逆に春陽堂とその関係作家を有利にし、天外はその右翼に位置していたかと推定されるのであり、確固たる地歩を占めるようになってきていたのである。

高山樗牛の死は、これまで文壇に獅子吼してほとんどの作家をやっつけて来た評論家から作家が解放感を得たことを意味するであろう。表面的にしろゾライズムの天外はニーチエイズムの樗牛の極端に位置するはずであり、樗牛は天外を、〈必ず写実小説の四字を標榜し、揚言して曰く、小説の要は有りの儘に写せば足る、作者の空想の導くところ、読者は須らく随伴して不満なかるべしと。是の如き無意義なる主義の上に、『恋と恋』を初めとして幾多の新作は公にせられたり。(略)天外は抑々如何にして、斯かる没分暁なる写実主義の上に自家至重の専業を寄托し、剰へ是を自家製作上の覚悟として公言するの盲挙に出でたりしか、吾人の思料し能はざる所に属す。〉(「明治三十四年の文芸界」――「太陽」明35・1)と罵倒していたのである。

尾崎紅葉の死そのものは、「魔風恋風」の連載完結の二箇月後である。かつて天外を冷遇した紅葉[7]が読売を追われるように退社したのは、病苦を主とする不振ゆえであり、もはやその活動は望めなかった。新進作家の気負いと紅葉への見返しとをこめて、桧舞台の読売新聞に立ちえた天外に、文壇の成功は半ば約束されていたのである。

以上によって、当時の天外は文壇的には有利な位置にあって発展を期しえたのであり、「魔風恋風」はその実現の一大試作でなければならなかったのである。

要するに「魔風恋風」は、「金色夜叉」を凌駕する当り作たるべく、大衆性と文芸性の両面からの野心大作を期して執筆されることになったのである。当時天外は、自身や家族の健康と経済的な事情から小田原に居を移していたが、内的な理由もあったことを次のように回想している。

焦慮って創作したところが駄目だ、何人をも動かし、いつの時代にも読まれ、批評家などゝ云ふ弄筆業者に

は、手も目も達かぬ高壇に位置する作を成すでなければ、小説家としての存在いくばくぞや、此うした奮発をも私かに抱いて東京を棄てた私であった。（「その頃」後出）

連載開始当時の時評に、草村北星「文壇小観」（「文芸界」第一四号、明36・3）がある。

魔風恋風 小杉天外子の近業中最も精神をこめられたとのことで現に読売の読者を悩殺しつゝある本編の如きは、確に本年文壇の大作たると共に佳作であらう。例に依って精到周匝の筆致、惋約滑脱の会話読んで凝らず、読み返して飽きが来ぬのである小説雑誌と云へば近来少くないが、絶えて佳作を載せたことがないので、己むなく自分等はまどろっこき新聞によって読書の渇を医してゐる。自分等の如き駈出の後進輩の為めには少し先輩が奮発してくれないでは心細くてやりきれないのである。読売は子の小説のあるばかりに毎日再版迄してるといふが紅葉の時代にもたしかそんな事はなかった。

当時の新聞の再版というのは具体的には知らないが、異例とのことで、その歓迎が察せられる。また当時の小説界不振の印象を裏づけてもおり、「魔風恋風」が期待作であることを好意的に記している。もっとも筆者が、家庭小説の草村北星ではあるが。会話のうまさということも現代小説では必須の条件であったようだが、天外も、型に捉われた紅葉の描写や会話からの脱皮を意図した。〈私は、会話なぞもずっと現実に近いものにしようとつとめました。意味ばかりでなく、音をも、現実のままにうつし出さうとつとめました〉（『魔風恋風』のこと」後出）と語っている。北星もその点にいち早く目をつけているし、同時代の歓迎のポイントの一つもそこにあったと思われるが、のちに花袋は、〈以前に柳浪が陥ったと同じやうな、対話で運ぶ弊に陥ってゐた〉と述べ、〈深く突込んだ〉写実をそらした欠点としている（『近代の小説』二十五）のは、自然主義と写実主義ないし通俗小説を手法によって分ける一つの指標を示しているようである。

「魔風恋風」は、一部からは誨淫の書というような批判もあったらしい（未調査）が、掲載中から単行本として分冊刊行されていった受容状況の一端は、後編巻末に附載された「魔風恋風前編評判記」が各紙の評を摘記収録していて、比較的容易に知ることができる。収めているのは、新聞では「東京朝日」「報知」「国民」「都」「東京日々」「京都」「秋田魁」「読売（二種）」「北鳴新報」「万朝報」「大阪毎日」「京都日出」「神戸」「横浜新報」「芸備日々」であり、雑誌は「白百合」「文芸界」「帝国文学」「新声」である。各紙の記者は、初出掲載時に完読していない者が多いようで、皮相な感想にすぎないと言えるが、おおむね前編自序

（後出）を基準にして、実在人物をモデルにした写実小説である点に触れ、〈世の所謂婦人問題、女学生問題に意を用ゐる人にも多少の利益を与ふるものと信ずる〉という天外のことばから、社会問題に取り組んで写実する姿勢に期待を向けており、当代の人物が活写され、会話・文章・筋の面白さという技術面の評価が高いと言えよう。だが一方では、型どおりの感傷的官能的な、いかにも通俗な描写こそ青年男女をとらえている本質だとする評（万朝報）や、モデルによる繋縛を越えた真の創造を期待するもの（読売）、深い人生の意義が問われていないという批判（新声）、深刻味の不足の指摘（北鳴新報）、露骨な描写の不快を訴えるもの（帝国文学）、一部の人物の性格のあいまいを指摘するもの（白百合）もあり、写実小説や天外自身の限界、通俗小説への傾斜をすでに読みとっていて、次の時代への動きが、一般的にも現われかけている。

同時代評を精査してはいないので、おおよその見通し程度のまとめになるが、以上によって「魔風恋風」は、同時代の社会事象を写実的に描き出して問題を提起しようとした作者の意図が迎えられながら、それにもかかわらず、底の浅い風俗小説ないしは通俗小説等の様々の受け入れ方も持って拡まったのであった。だが当時の評には、社会小説とか通俗小説という語は現われていない。社会小説の語は、実作が伴わないままにこの二、三年あたりから姿を消したようであり、通俗小説の語は、そうした概念はできていたようであるが、まだ語は成立していなかった。『座談会：明治文学史』（岩波書店）の「明治の大衆文学」における次のような部分も注意を要するところである。

猪野「魔風恋風」なんていうのは、あのころは家庭小説の中に属さなかったんでしょう。

柳田　属さないで、いわゆる文壇文学のほうへ入っていた。

今日では、「魔風恋風」の中に家庭小説的側面を認めることができるが、当時はこの作にそうした語はもちろん、意味的にも求めているところがない。柳田の発言は正しいのである。

その後、大いに読まれながらも、いちおう明治の〈女学生小説の二傑作〉である〈「魔風恋風」と「青春」とは、道学者や女子教育家からは、堕落女学生を描いた二標本で、これを飜読することは、その者も堕落へ誘引される怖れがあるやうにいはれた[8]〉という誤解をさえ負わされて、文学からも歴史からも放逐されたのである。[9]

そして今日では、作品自体に原因があるのだが、明治三十年代を代表する通俗小説という以上に記憶されない、死んだ古典というわけである。

二、材　源

「魔風恋風」の成立に関して述べている文献には、次のようなものがある。

(A) 「読売新聞」掲載予告（1、明治三六年二月一一日より。2、同月二二日より。以上の二種がある。）

(B) 単行本前・中・後編の自序（明36・5—37・5）なお改造社版『現代日本文学全集53』にも収載。

(C) 小杉天外「処女作時代の回顧—附、作家の主張と魔風恋風—」（「新潮」第六巻第五号、明40・5）[10]

(D) 小杉天外「『魔風恋風』のこと」（「早稲田文学」大15・4）のち「明治大正文学研究」（8号昭27・10）に再掲。

(E) 春陽堂版『明治大正文学全集16：小杉天外』自筆解題（昭5・1）

(F) 小杉天外・湯地孝記「写実小説時代—ゾライズムを訊く—（談話筆記）」（「国語と国文学」昭9・8）

(G) 小杉天外「思ひ出断片（談話筆記）」（明治大正文学研究」1号、昭24・9）

(H) 小杉天外「『魔風恋風』小引」（岩波文庫『魔風恋風（前篇）』所収、昭26・9）

(I) 小杉天外「その頃」（岩波文庫『魔風恋風（後篇）』所収、昭26・9）

これらをもとに、作品の背景や素材についての調査報告をしておきたい。

まず読売予告の(A)の2の全文を掲げる。（(A)の1は、ややの簡略である。）

▲魔風恋風　　小杉天外

是は今の女学生を捉へて題目と為し描き来つて百回に亘るべき一大写実小説なり。蓋し作者の想、天外より落ち、一気旋転球の盤上を走るが如く、而して之を行るに神来の筆を以てす。其の作世既に定評あり。作者今回特に我社の為に此一大雄篇を草していふ、明らかに写実主義の本領を発揮して、世間非写実主義者に向て一大鉄槌を下し、併せて其の反省を求むる所あらんとすと。作者此大抱負を以て旧冬来一切の繫累を絶ちて、構思深遠、経営惨憺、以て私に明治文壇の一異彩たらんを期せり。借問す其神来の筆は果して如何なるものを我文壇に提供せんとするぞ。女学生とは誰れぞ、之を囲繞する女性と男性とは何者ぞ。腐敗か高潔か、堕落か改悔か。或は笑ひ或は泣き或は怒り或は怨み波瀾畳出、千態万容の実景を描写し得て神に入る。而して其中心には主義あり、理想あり、熱涙あり。真に是今代稀有の大作、啻に癸卯文壇唯一の名品たるのみならず、明治文学史の花として雄を後世に誇るべき

もの。

問題にすべき点はいくらもあるが、当面、〈今の女学生を捉へて題目と為し〉、〈千態万容の実景を描写〉して〈写実主義の本領を発揮〉しようと企図するに至った社会的背景を確認しておきたい。天外自身、〈新しく抬頭して来た一つの社会群としての女学生を描いてみよう〉(F)とした点を肯定している。

まず同時代の女学生が一般からどのように見られていたかを、「魔風恋風」の会話で示そう。

・なアに、阿嬢様だらうが何だらうが、此の頃の女生徒なんざ。(画工の家　一)

・なアに、女の学問なぞ知れたもんだ、今に男でも拵へて、私生児(てなしご)でも産む位のものさ、なんてね……(同胞　二)

・当今の女学生には、学資に窮して、屢(よ)く淫売を為る者が有ると云ふが、貴女は其様な人ぢや無からうね…?(子爵家　六)

・屢く新聞に出る操を売つて学資を作るなど云ふ話も、金の得難い為め、また志しを遂げ度い為めの窮策から出るのであらう、(診断　一)

引用はほんの一部であるが、全体を察するには十分であろう。作中に〈去年の春、女学生の醜聞が世間に喧ましく無かッた頃〉とあり、たしかに、明治三十五年から発表時に至る女学生の醜聞なるものが踏まえられているのである。そしてその醜聞はどのようなものであったのか。天外自身が読んだという「万朝報」(後出)の社会面から、青年男女関係の記事のすべてを拾って眺めてみたい。なお「万朝報」は、三面記事もどぎつさと執拗で定評があり、一般読者の人気では第一等の赤新聞であった。

(※印は女学生とそれに準じた者に関する記事。見出しと内容略記を掲げる。)

明35・1・10　書生の喧嘩

28　学生の自殺(男。試験に落第、発狂して喉切り自殺)

2・6　※堕落医学生(下宿の娘を妊娠させ、親に叱られた娘は家出して学生と同棲、親が娘を連れ帰る(が男が不承知))

7　※妊婦(はらみをんな)の駆込訴へ(看護婦修業の目的で上京したが、男ができ、妊娠して捨てられ、訴え出たてんまつ)

16　学生の乱暴(男。けんか)

3・14　堕落学生の決闘騒ぎ(男。同性愛の三角関係のもつれ)

27　※堕落女学生(俳優とできあって親がもてあます)

4・7　書生の窃盗

8　書生の詐欺

24 堕落書生（頼まれて質入した金を横領）
5・3 上野公園に学生の争闘（集団けんか）
9 乱暴な書生（泥酔して通行人に暴行）
15 学生職工の金の出処（分不相応の大金消費で嫌疑取調中）
21 学生の乱暴
25 鶏姦犯捕はる（オカマ未遂の堕落学生）
6・10 学生九段坂に斬らる（けんか）
12 ※学生同志の情死（学生風男女の水死体漂着、女は妊娠五箇月ぐらい）
13 ※少女の投身（学問したいが許されず、自殺）
14 書生の窃盗
15 九段に書生を斬りし犯人（これも学生）
18 女ゆゑの賊（地方出の苦学生の堕落）
破落戸書生（ゆすり）
22 工女二人の投身（虐待に耐えられず）
24 工女の逃亡
27 乱暴書生の拘留
7・5 犯人の就縛（オカマねらいの二学生）
7 怪しき大尽客（遊廓で大金消費の不審学生取調中）
9 希有の悪書生（ホモで粗暴な学生の傷害の示談さわぎ）
13 意気地なき書生と乱暴書生（学問したさに家出したが飢えて保護された男とやけくその退学々生）
16 無法な書生（人妻へのわいせつ行為）
20 法律書生の狼籍（暴行わいせつ行為）
21 哀れなる女工（年は十三）（酷使、逃亡、行き倒れ、告訴）
24 学生の喧嘩
28 無頼書生（ゆすり）
29 ※女学生は一読せよ（稚児ケ淵の情死）〔後出〕
30 仏教生徒の吉原通ひ
8・1 工女同志抱き合ふて轢死す（虐待に耐えかね同性心中）
15 書生（窃盗）
18 元看護婦の堕落
23 大学生の賊
24 埼玉の工女虐待
29 艶書を懐にして徘徊す（挙動不審の男）
9・7 学生の暴行（無銭飲食、乱暴）
8 鐘紡の工女投身を企つ
19 ※蝦茶袴の綻び（家出女教師の奇妙な四角関係）
※之も女生徒の堕落（放らつ女学生の無賃宿泊）
10・5 ※又も女学生の醜聞（妊娠して退学処分の女学生が、家からも追出され、荷物一つ持たずして上京し、新橋駅で荷物を盗まれたと狂言をうってバレた話）
7 ※女学生の行衛不明（親が娘の堕落を心配して退

学させると、行方不明になった。本当の堕落か芸者にでも売られたのか、捜査中）

12※女学生の紛失物（下宿女学生の紛失物は、下宿の主人が盗んだのだが、女学生は大学生の夫と詰談判で白状させた。）

18※一対の堕落学生（右の男女の内幕暴露）

25 高利貸と大学生（借金して遊蕩）

27※女学生の道行（母とともに上京中の女子学生が母の目をくらまして行方不明、目下捜索中）

30 馬鹿太き法学生（印鑑偽造）

11・3 悪書生短刀を振廻す（下宿を食い倒した学生のさか恨み）

14 堕落生二件（強迫と窃盗）

15 学生の堕落（無銭飲食）

19 自転車泥棒は書生

20 学校生徒の重傷騒ぎ（男生徒の校内での傷害沙汰）

29 堕落書生の闘争（けんか）

30 学生の退学処分（傷害から）

12・4 埼玉の工女虐待

10 勉強の余暇に泥棒（男）

11 学問せんとて拐帯（男）

13 高等商業学校生徒の醜行（遊女にうちこんだ学生が強姦か和姦か、大さわぎ）

14 大学教室を徘徊する曲者（他学校生の窃盗）

16※市内の高等私窩子〔後出〕

17※市内の高等私窩子（ぎっ）〔後出〕

18 泥棒書生二人

21 学生の果（男。使い込み）

22 情婦を連れて遊学（女を連れて上京し、散財して途方にくれているところを説諭引渡し）

23 放蕩学生の果（置引き）

明36・1・23 放蕩学生の果（退学々生の詐欺）

2・11 学生の自殺（男。煩悶の果）

14※教員と女生徒の情死（静岡県）

16 堕落書生（けんかを売る）

17 堕落書生の成（なれ）の果（娼妓にいれあげ、苦学から果ては窃盗）

22 鉄道自殺（男。放蕩の罪を謝して）

23 悪書生柳橋辺を荒す（詐欺）

以上が、明治三十五年々頭から「魔風恋風」掲載までの一年二箇月に亘る青年関係の三面記事である。記事の真偽はともかく、この量と扱い方はやはりこの時代の表現であり、天外自身の社会知識の多くもここに依拠していると考えられる以上、軽く見すごすわけにはゆかないであろう。

＜堕落書生＞＜堕落（女）学生＞の語が一般化した世相をうかがうに足る記事の質量である。女子学生より男子学生の不良行為がはるかに多いにもかかわらず、一般は、女学生の素行を基準にして槍玉にあげるのであろう。そして「

万朝報」においては、たしかに女学生の不良行為は三十五年の四月頃より現われ始め、下半期がその長文記事で持ちきっている。そしてこの時点が「魔風恋風」の構想の期間でもあったのである。〈読売新聞社から長篇掲載の依頼は、三十五年の秋だったと思ふ。〉(I)と言い、また〈関如来氏が九月十四日に訪ねて来まして、長篇を書いてはといふ話がありました。〉(D)というのが天外の回想であり、〈旧冬来……構思〉(A)していた。以上の記事によって、前掲の作中における女学生の評判はほぼ裏づけられていると思われるが、とりわけセンセーショナルな問題は、女学生が経済的困窮から売春までしているという風説であり、作中のヒロインもその一歩手前まで進んでいたのだった。そうした女学生売春の風説を確定して拡めにてこ入れした記事こそ、次のようなものであった。前掲「市内の高等私窩子」(明35・12・16、17)から原文のまま引用する。

高等淫売と一口には云へず其種類様々にて先づ御殿女中、奥様、後家、蝦茶袴の四とすべきか熟れも其素姓に依りて分けたるには非ず彼等が出没する時の仮装を云ふなり此内蝦茶袴を穿つものゝみは過半純然たる女学生が種々の原因に依りて堕落したるものにて他種のものが女学生に化け居るは尠しと云ふ

女学生姿の売春婦は、本物の女学生がほとんどであるというのだ。また続いて次の記事は、「魔風恋風」の構想やヒロインの設定に密着しているものとして注意を要する。

女学生の化して淫売婦となり下れる者の中には事情愍む可きもの少からず学費の中絶したるもの、始めより学費なく人の助に依りて勉強し居るものが中頃其人に捨てられたるが看護婦産婆等を志願にて手続中とか其準備中と云ふ折には仮令飢渇に迫りても学業を中途に廃すに忍びず衣食の為めには時間を労働に充つるにも忍びず兎角に苦心する処を見込みて堕落を誨(をし)ふる悪人共下宿屋桂庵等が寄つて集つて彼等を餌物にせんと謀る事故知らず〳〵の内に此魔界に足を入れぐつ〳〵(ママ)して居る間に目的の学業は出来上らず専門に近き高等淫売婦となり終るなりと左なくも慈善家らしき顔して此等其日の生活に苦み居る女学生に僅かの学費を給して揚句の果は恩を枷に其操を汚し為めに方針も運命も滅茶苦茶に蹂躙されて仕舞ひ出来た子は里にやり痩れたる姿に尚海老茶袴を穿ちて学校通ひを更に始むる者もある可く奸智に長けたるものは巧みに此下劣なる手段を利用し有福なる子弟を誑して数年の学費をせしめ是を以て頗る高等なる学業までなし終り済した顔して教鞭をとりて尚従来の悪徳を繰り返へし居る者もある由

当時小田原に住んでいた天外は、東京の風説を直接耳に入れることはなかったと思われ、その点からも、この記事は重視されてよいのではないか。「魔風恋風」の構想の過

半は、この記事とあまりにも類似している。

ヒロインの初野は、家督の異母兄の反対を押しきり、学問を求めて上京したのであり、家は比較的裕福ではあったものの、最少限の学資のほかは、大けがをしてさえ治療費も送ってもらえず、家からは見舞にも来なかった。貧困と孤独に耐えて学業に精励する女子学生だったのだ。入院の治療費から初まって、彼女の生活は狂いが生ずるのだが、親切ごかしに下宿屋の主婦が、道楽者の画工殿井の援助を仲介し、初野は殿井の誘惑をひじ鉄でなんとか逃れもしたのである。そのうえ家出した妹が転り込んで来るなど窮迫はつのるが、〈何の、卒業と云つても此の六月、七月になれば妹も救はれるのだ、たゞそれ迄の辛抱なのだ！〉と学業に執着する。もっと安い宿に移って自炊しようかと思うが、勉強の時間が惜しい。援助を申し出ている友人のその父子爵からあわや手ごめのところを逃れたこともあった。脚気にかかっていても、〈卒業も僅一箇月を余すのみの今に到つて、幾ら病気が怖ろしいと云つて、幾ら生命が惜いと云つて、試験を放棄(うっちゃ)らかして転地などがして居られようか！〉と心に叫び、〈自分とても借りらるゝならば高利の金でも借りやう、買ふ者があらば、身体の血でも絞つて売らうものを！〉と新聞に出る売春女学生に共感もするのである。そして、〈急に胸が悪くなッて、目が眩くなッて、最う起つて居る力も無く、我にもあらず其処に突伏したが、突伏すと同時に、咽喉も裂く計りに突上る嘔気の苦み。（略）初野は身を倒(さかし)まに煩悶(もが)いて、其処の土間へ何物かしたゝか吐出した。〉という思わせぶりな叙述もある。いわゆる堕落の危機にさらされて悲運の死を遂げるヒロインの環境は、この記事とまったく軌一しており、この記事が直接構想に関与しているかと推測されるのである。

以上のような記事によってつくられる女学生観にもとより問題はあり、学生の堕落として皮相に三面記事をとらえる一般に対して、「魔風恋風」が何を提示しようとしているのかという点こそ文学の真の問題ではあろう。こうした記事を生む時代の本質的な考察と関連してこの作も論ぜられねばならないのであるが、そのためには、狭くとも「万朝報」の論説を兼ね合わせて考える必要がある。当時「万朝報」には、幸徳秋水や堺枯川が論陣を張っていた。今その余裕のないままにいちおうまとめれば、「魔風恋風」は、たしかに当代のセンセーショナルな風俗事象をとらえて小説化しており、それゆえに人気作たりえたことが理解されるのである。

ところで天外は、この作品に具体的なモデルがあったことを述べているので、これについても可能な限り調査を進めておかねばならない。前掲文献から引用してみよう。

(B)〔後出〕

(D) この作品は、当時、万朝報紙上で、本郷森川町辺に

下宿してゐた或る看護婦が自殺したといふ記事からヒントを得て事実を調べ、それを基として書いたものです。

(E) 女主人公は当時一二の新聞に報道された、モルヒネ注射の量を誤つて死を招いだ某苦学女生をモデルにしたのである。

(F) あれはモデルがあるんですが、看護婦をしてゐた若い女で、その女の新しいところが興味を惹いてあゝいふことになつたのでした。

(D)(E)(F)は、それぞれ補い合うものと思われ、さして矛盾した点もない。そこで当然ながら、天外が読んだという「万朝報」からそのような三面記事を探すことになる。調査の下限は、作品がお目見えするまでとしても、上限が問題である。写実主義を唱え、〈流行児たる大学生と、新学士と、高等官の家庭を描写〉した「新学士」(「大阪毎日」明34・1—3)の作もすでにあって、天外が当代流行の風俗に強い関心を寄せていることから考えると、明治三十三年あたりから調査する必要がありそうだ。だが、〈三百枚に垂とする新作を、三十二年の春から三十四年の秋まで、他にも新聞社や雑誌社の依頼物を抱へながら、睡魔除には興奮剤を服し、氷嚢を載せて頭痛を抑へ、(略)毛筆を握り続けに続けて、追蒐けるやうに春陽堂から発行させ〉(I)て神経衰弱になり、三十五年五月に小田原にひっこみ、そこでゆっくり大作を期したというのであってみれば、上限を明治三十五年五月としてもよいようである。そこで再び、前掲の記事一覧を用立てることにするが、見ればわかるやうに、(D)(E)(F)に直接該当する記事は見当らない。しかし後年のものである(D)(E)(F)に、記憶の混乱や意識的無意識的な作為があることも予想される。そこで中味に幅を持たせて探すと、七月二十九日の記事が浮かび上ってくるのである。その全文を掲げよう。

●女学生は一読せよ(稚児ケ淵の情死) 去六月十二日の本紙に学生同志の情死と題して記載せし相州江の島沖へ男女学生の死体漂着したる次第は既に読者の知る所なるが今其何者なるや判然せしより堕落せる今日の女学生等を戒むる為め其詳報を記さんに女は帝国婦人協会寄宿生大分県生の足立松枝(十九)男は神田中学校卒業生福岡県生の久野堯太(十九)と云へる者にして此松枝は天成の麗質世にも稀なる美人に生れ父母の寵愛一と方ならざりしが眉目よく生れしが身の仇となり松枝十四歳の春より情を解し十六歳になれる折には密夫其数を知れざる程にて流石の親も手に余し定まる夫を持たせたなら娘の乱行も止むならんと思ひ広島県代議士小田貫一の甥小田耕作と云ふ書生に松枝を嫁合せ去三十三年四月若夫婦は睦ましげに上京したるが間もなく松枝は小田を嫌ふて自分は帝国婦人協会の寄宿舎に入り其

後芝区三田台町二丁目八番地山田某方の二階に移り益す乱行を働きたる末更に備前岡山へ赴き医学生井田義雄と通じて京坂地方を浮れ廻り同年十月帰京せし後は下総銚子町の酒造家岩崎長三（三十四）を手管にかけ夫婦気取にて諸所を遊び歩き居る中兼て松枝が知合なる麻布区材木町七十八番地芳賀義雄と云ふ法学生が痛く松枝に忠告を加へし所多情なる松枝は却て義雄を口説き落し末迄の契を結び国許へ手紙を出して金銭の請求頻繁なるより父も漸やく松枝の所業を疑ひ見物かたがた出京して様子を捜れば前記の始末判りたるにぞ大いに驚き叱るも今は詮方なしと断念め義雄と松枝を改めて夫婦となし一と先づ松枝を国許へ連れ戻らんとて帰国の途につき大坂まで至りたるに松枝は父の隙を窺ひ逃亡して出京せしより義雄は其不心得を責め旅費を与へて帰国させたるに又もや静岡より引返したれど後いよ〳〵帰国する事となり国許にて謹慎なし居ると思ひの外情夫を拵へ大隅日向薩摩の諸国を徘徊し昨年十二月中帰宅したるが此時既に主知れぬ胤を宿し始末に困り去[illegible]月五日の夜再び家を逃亡して十三日に着京し阿部阿露と偽名して日本橋区青物町二十七番地千々和政喜方の小間使に住込みしも妊娠を看破せられしかば先月二日窃に同家を飛出し大胆にも無一文にて本郷区森川町十一番地長清舘へ止宿し千々和に奉公中知合になりし同区追分町百番地田中方止宿の小野堯太を呼出し手管にかけてたらし込み堯太が帰国の旅費十五円を遣ひ同月四日堯太と共に長清舘を出で同日午後五時頃藤沢駅に着し夫より江の島へ赴き讃岐屋へ投宿したるが堯太は全く美貌の松枝に迷ひ夢中になりて死なば諸共と思ひ込みたるものならん其夜人々の寝静まれるを窺ひ堯太と松枝は手に手を取りて数ふる鐘のありやなしや虎が昔の大磯の彼方に見ゆる暁に浪吼ゆる稚児ケ淵に辿りつきザンブとばかり身を投げてうたて浮名を流せしものなりと云ふ慎むべきは色慾の道なり

この記事は天外の語るところとは、非常に異る印象を与えるであろう。ヒロインが看護婦であるという点が明確ではないし、服毒による自殺もしくは過失致死という点がぜんぜん見られない。疑わしいところがあるが、私自身は、以下の点において、これを該当記事であろうと考える。

(一) 細部ではあるが、ヒロインの居所が完全に一致する。(D)に〈本郷森川町辺に下宿〉とあるが、記事においてもヒロインの最後の居所について、〈本郷区森川町十一番地長清舘へ止宿〉とある。具体的な地名の一致は偶然とは言いがたい。

(二) ヒロインを(D)(F)は〈看護婦〉と言い、(E)では〈苦学女生〉とある。これについては、前掲記事「市内の高等私窩子」によると、看護婦資格をとろうと苦学しつつ看護

婦見習になっているものもいることが推察され、そもそも矛盾しないのであるが、この記事のヒロインも、〈看護婦〉とは記されていないが、ほぼ一致していると見なされる。ヒロインは〈帝国婦人協会寄宿生〉であるが、帝国婦人協会は、下田歌子を首長として明治三十二年に設立され、女子教育を目ざして教育・文学・工芸・商業・救恤の部門を置き、附属の女学校・女子工芸学校を設けて今日の実践女子大学の母胎となったものであり、明治三十四年には規模を拡張して地方支部も設けるほど全国から学生が集まり、寄宿舎等も完備したのであった。記事のヒロインは、たぶん協会の救恤部門に関係していたかなにかで、協会がそうした女子職業養成機関と受けとられ、〈看護婦〉と単純に理解されたということが考えられよう。そして記事には彼女が学生であるとは記されていないが、寄宿舎にいた点から附属学校の学生でもあったと見られる。以上によって、ヒロインが看護婦であり学生である点が合理的に理解されるのである。

(三) さらにこの記事は、「魔風恋風」そのものの構想に触れていると見られる点を含んでいる。記事は、ヒロインを放らつ多情の毒婦のようにしか描いていないが、美貌のままに周囲の男たちから誘惑され、犯されるなどして転々と居を替え、自家の強制も逃れて東京に、あるいは学問に執着し、そうした中で自らも恋をし、最後には絶望して心中する女として十分に読みとることができるのである。そうしてみると、作品のヒロイン初野も、姦通と妊娠と心中を除けば、ほとんど記事のヒロインと重なってくることに気がつく。とりわけ関連を思わせるのは、記事中の芳賀という法学生の存在であり、彼はヒロインに忠告しつつ彼女への愛に引き寄せられていく。この法学生は、作中の帝大法科学生の夏本東吾のモデルではなかろうか。彼はヒロイン初野の相手役をつとめており、初野の信頼する相談相手で、二人はいつか恋をおぼえるようになり、東吾は、義理ある婚約者を捨てて初野のもとへ走ろうとさえしたのだった。その他、国元から親が上京してヒロインを連れ帰ろうとして途中からヒロインが逃げ出し、再び上京するところは、作品では、ヒロインの妹がかつて家出して上京し、いったんは連れもどされるが、再び上京してヒロインのもとへ転げこんで来るという設定と関連があると思われる。それにもう一つ、小さいことのようだが、記事のヒロインが〈帝国婦人協会〉の寄宿生であり、作品のヒロインが〈帝国女子学院（仮名）〉の学生であるという名称の類似も気になるところではないであろうか。以上のように見てくると、作品は多分に印象を異にするが、基本的な構成や部分的趣向に類似が指摘され、塗りかえられた「魔風恋風」に先立つ原構想へのヒントとなったことが考えられ

るのである。

(四) 最後に、記事そのものが天外の創作意欲を喚起するものであったろうという点について推測したい。記事において、天成の美貌と淫蕩なヒロインが情の趣くままに男性遍歴をかさね、ついに最後の男と断崖に身を投ずるというゆくたては、そのままでゾラ的な筋とヒロインを示してはいないであろうか。ゾラに範をとって「初すがた」「はやり唄」で名をなし、「初すがた」続篇となる「恋と恋」(明34)を書いていた天外であり、さらに典拠を越えて当代の現実に関心を向けて「新学士」を試作していた天外であった。つまり、ゾラに強く動かされつつ具体的な素材を当代の現実社会に求め、その典型化によって写実主義の革命を期して新聞に注意していた天外を想定する時、雑報「女学生は一読せよ」はいかにも天外に迎えられそうな記事であり、また、論説の先鋭と三面記事のどぎつさで売りこんでいた「万朝報」を彼が読んでいたということもうなずけるのである。

以上の諸点から、「万朝報」の記事にヒントを得たという天外のことばを信ずるかぎり、その具体的な記事は「女学生は一読せよ」であったろうと言わざるをえない。記事においてぜんぜん見ることのできない自殺ないしは服薬による過失致死(この両説を作者自身が立てている点にすでに疑問がある)の件は、ヒロインを加工してしまった作品に対する言いわけではなかろうか。貧窮と誘惑の中で向学の意志を抱きながら愛と友情の板ばさみとなり、ついに恋を断念して孤立した時に脚気衝心で倒れるというのが作品のヒロインであるのに、そのモデルが情死であったというのでは、何としても写実主義の看板にいつわりがあろう。そのために天外は、小説にフイクションの加えられていることをにおわせつつ、ヒントとなった記事内容を、ヒロインの孤独な死という方向にゆがめて語らざるをえなかったのではなかろうか。

天外自身の発言内容が歪曲しているという点にもふれて、モデル論では、今ひとつの天外の記述をす通りするわけにはゆかない。前に省略しておいた(B)である。

(B) 作中の主人公と二三の主なる人物とは、曽て世に在つた人、それから今現に世に在る人をモデルにしたのだ。／とりわけ主人公とは五六回も面を会はしたことがある、全く美人で、学才も秀でて、男に騒がれた事は中々爰に描いたやうなものでは無かった。病気を得たのは、もう少し悲惨な事情からであるが、今の小理窟の小五月蠅(うるさ)い日本では、遺憾だがそれを有の儘に写すことが出来ぬ。(前編序)

この(B)は(D)(E)(F)の記述とはあまりにも差異がある。(D)(E)(F)において、作者天外はヒロインと現実に交渉があったとは思われず、推定した新聞記事からもそのように言えると

思うが、(B)では、天外がヒロインの生前に面識があったという。また(B)の病気の件は(D)(E)(F)においては明確ではなく、逆に、(D)(E)(F)の自殺等の線は(B)に現われていない。(D)(E)(F)と(B)を無理にもつなげようとすればつながらないものでもないが、これはいちおう別物と見たほうが妥当であろう。とすれば、ヒロインのモデルは二種あったということになろうか。そうとすれば、天外は新聞記事にヒントを得て、さらに具体的なモデルを身辺にも求めて構想したということになろう。

だが実のところ私は、この(B)をはなはだ疑わしく思っている。というのは、(B)はあまりにも作品に密着しながらも客観的記述がなくて、その事実を確かめることができないこと、いったい天外の姿勢は、序やエッセイにおいてとかくもっともらしい大言壮語の調子を帯びること、さらには、この作品が当代社会の生々しい現実を描破する写実主義に基づいていることを鼓吹宣伝する必要があったことなどから、一種の〈呼び水〉をさして人気をあおる手段としてほらを吹いたのではなかったかと推測するのである。ただこの頃、〈医薬に親み勝ちな妻子の健康、月々に増額して行く月末払支弁の困難〉(I)という状況を体験していた天外にとって、観念のヒロインがごく身近なものに感じられたであろうとは言えよう。

以上、「魔風恋風」の材源を求めて若干の考察を進めてきたが、いちおう結論としては、「魔風恋風」はやはり同時代の典型的な社会事象をとらえて描いているということであり、この材源から作品への分析については後日を期したい。

三、テクスト（メモ）

最後に、「魔風恋風」のテクストについて略述しておきたい。管見によるテクストには次のようなものがある。

(1) 「読売新聞」初出本文（明治36・2・25—9・16、二〇四日間、一九二回）

(2) 単行本『魔風恋風』三巻（前編—明36・5、中編—明36・11、後編—明37・5、春陽堂）

(3) 縮刷合本『魔風恋風』（大3・10、春陽堂）

〔注〕『魔風』は大正三年迄もとの儘で増版し、それ以後縮刷にし、震災で焼け、目下また縮刷を印刷中です。（前掲(D)）

(4) 明治大正文学全集16『小杉天外』（昭5・1、春陽堂）

(5) 現代日本文学全集53『小杉天外集・山田美妙集』（昭6・10、改造社）

(6) （日本近世）大悲劇名作全集2『魔風恋風』（昭9・8、中央公論社）

(7) 岩波文庫『魔風恋風』二巻（昭26・9）

(8) 大衆文学大系2『小杉天外（外三名）集』（昭46・6、

講談社）

(7)までが天外生前の出版であり、(2)において附された序文が、その後削除されているものが多い。また各編に分けているもの、分けていない通しのものなどいろいろである。

本稿では、作者自身による改稿修訂にふれておきたい。

(1)初出や(2)単行本の最末尾は次のようになっていた。

一生を処女で終った初野の法名、芳顔院賢誉妙節大姉の位牌は、芳江が室に香花の絶えず供へられて居る。

しかし、この末尾は、(3)縮刷版以降すべて削除された。ヒロインの処女性について特筆してあったという事実は、作品の社会的意味の考察にも少なからず問題を有するであろう。

また「珍事」の章にも削除による大改訂が見られる。(1)初出（明36・8・20）の冒頭から掲げよう。

東吾の云ふ如く、傍に双親が付いて居る芳江であるから、幾ら厭と強情を張るとも、その中に聟を迎らるゝに決つて居る、聟を迎れば長い間には其方に情が転らずには居まい、然うなれば自然東吾をも断念る事であらう、けれども其忘るゝ迄其断念る迄の悲は何様なであらう！　現に病気に罹つて居ると云ふ、其の病気の東吾が恋しさに発つたことも、病状の軽からぬ事も、一旦承知した離縁談を急に取消したのでも分かる…、あゝ可哀想な事である。

東吾様の如彼まで云ふものを、可哀想だからとて私の力で何うする事も出来ぬのだが、併し芳江様の心の中では朝夕の薬よりも、何様なにか私からの音信を待つて居らるゝか知れぬ。「力と頼むは義姉さん一人」と涙を零して云はれた、彼の温順い心で、私と東吾様と此う云ふ関係の有らうとは疑ひも起すまい、夢にも思ふまい、無論此様な事と気の着かう筈は無いが、併し、此事が何時までも知れずに居る事では無い、学友間の噂、それで無くも他日東吾さんと同棲にならば、最う隠す事も弁解する事も、日月空に懸れば昼夜は瞼を閉ぢて欺かれぬ、不義の証拠は芳江様に一生面を会はする事も出来ぬのだ。あゝ、それと知つた時の芳江様の心は何様なであらう！

だが、私許り此う思ふた所が、肝心の東吾様が彼様なに嫌つて居るのであれば、到底纏まる縁では無い、而て見れば、何も私の故と云ふ訳でも無い、私計り此様なに気を揉むにも当るまいか……。東吾様には別に深い思慮が有らう、私は唯東吾様の言を守つて居ればそれで可いのだ、又それより他に仕様が無いのだ。東吾様の云ふ通り、其の中に芳江様の気も変らう、何卒か速く御養子が決まつて呉れゝば可い、速く結婚をして呉れゝば可い、それにしても、病気で臥て居る様では何

うする事も出来まい、あゝ、病気も速く癒(よ)くなッて呉れゝば可い！

初野は、今しも此様な事を思ふて帰つた所であるが、大方、母や女中やに撫恤(いたは)られながら、力なく枕に泣伏してゞも居るだらう、と想つた芳江に不意に抱付かれて、はッと息を呑んで、暫くは口も利き得ぬのであッた。

親友の婚約者といつしか相愛になり、親友への裏切りを決意しかけているところへ、親友がやって来たところである。ところがこの部分は、(2)単行本以降では、

不意を打たれた初野は、はッと息を呑んで、暫くは口も利き得ぬのである。

と、ほんの終りの部分だけになって、長々しいヒロインの心中の独白が削られた。説明的なくどさを省いたとも言えようし、多分に意志的なある種の不倫の恋を朧化したとも言える削除であり、これまた簡単に見すごすことはできまい。

またこの部分に直結して、(1)初出、(2)単行本ともに

「義姉さん、私、会ひたかつたわ！」芳江は猶も抱付いたまゝ、顔を視詰めたその眼には涙雨と落ちるのである。

とあるが、傍線部が(3)縮刷版以降では、

芳江は抱付いたまゝ、顔を視詰めたその眼には、もう涙が溢れるのである。

と、微少ながらも改められている。

同様の例をいま一つ掲げる。「逃亡」の章で、(1)初出(明36・8・8)の

無論、殿井か下宿の主婦かに附けられた智慧とは察して居るけれど、小憎らしい妹の口を聞いて、初野は、怒に身の顫ふを禁じ得なかッた。併し、今更叱つた処で何うなるのでも無い、何様な事を云はれて来たか、熟く夫(それ)を訊ねて、徐(しづか)に殿井等の卑む可き者なるを説いて知らせ、自分と東吾との間(なか)をも、悉とくは明さぬ迄も、東吾の学問が有つて男らしくて、親切である事位までは話して置かう、と此う思ふて……

と、ヒロインが妹を説得しようとするこの部分も、(2)単行本以降では、

初野は怖い顔をして、暫く妹を睨据ゑて居たが、何と思つたのか優しい声で……

と、やはり心理叙述を削除してボカしている。

以上掲げたのは一斑の例示にすぎず、また細密な校合を果してはいないのであるが、「魔風恋風」のテクストについての中間報告として次のようにまとめておこう。

(一) 初出本文とその後の本文との間には、かなりの差異がある。

(二) 単行本は、初出本文を大幅にまた微細に手入れしてで

きたもので、縮刷版は、単行本をさらに修訂している。

(三) 縮刷版から作者生前の最後の版である岩波文庫版に至るまでも、折にふれて修訂がなされているが、それぞれの修訂は微細であるとみられる。

(四) 以上によって、テクストは、時代順に初出、単行本、縮刷版以降のだいたい三種に分けられる。

常識ではあるが、通俗小説といえども、その考察に際しては、初出を主にしたテクストの吟味の重要が改めて感じさせられる改訂の多きであった。改訂の意味の分析も、すべて後日を期すことにするが、以上の大まかな考察においても、天外はかなり文章を吟味した作家であることがわかり、(11) また、今日の評価は低くとも、天外自身にとっては、満天下にその名を響かせた記念すべき作品として、〈世間でさわいだほど大したものではありませぬ〉(G) という晩年のことばはあるものの、内心では愛着を抱いていたことが、終生の加筆からも推測されるようである。

注

(1) 吉田精一『自然主義の研究（上巻）』一六二頁。
(2) 片岡良一「小杉天外」（同氏著『近代日本の作家と作品』二九八頁）。
(3) 前注（1）一六三頁。
(4) 瀬沼茂樹「日本現代文学全集31：小杉天外・木下尚江・上司小剣集—入門」（同氏著『明治文学研究』三一六頁）。
(5) 和田芳恵「大衆文学大系2：小杉天外（外三名）集—解題」
(6) 野村喬「前期自然主義の一齣—「地獄の花」をめぐって—」（「国語と国文学」昭30・9）。
(7) 小杉天外「鷗外、紅葉、正直正太夫」（「文章世界」明41・9）。
(8) 木村毅『明治文学を語る』（昭9）七三頁。
(9) 花袋の「蒲団」の一部に「魔風恋風」の描写が反映している点は、注意を要する。福田清人「独創と影響—現代文の扱い方（十一）—」（「解釈と鑑賞」昭27・3）参照。
(10) 未見。前注（1）一六三頁に一部引用。
(11) 近代文学館に、天外の日記や書簡、旧蔵の雑誌等が寄贈されているが、私はまだ調査していない。たまたま見た旧蔵の「新著月刊」（明30・5）掲載の「珈琲店」など、墨筆で一面に加朱校訂が施されていた。